
俺は君のもの！？

ゆきさだ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は君のもの！？

【Nコード】

N2932E

【作者名】

ゆきさだ

【あらすじ】

ある日、なんとなく公園で黄昏れていた。誰かに聞かれたら恥ずかしい独り言も言ったりして、って誰がいる！？それが奴との出会いだった！ある日の偶然で出会う二人の一旦走り出したら止まらない、痛快で爽快な超ドタバタ学園ラブコメディー！ここに参上！！

第一話 出会い

「ふうあゝ」

夕焼けが眩しい夕方。何故だかわからないが、俺は近くにある公園でブランコに座りながらボケ々と夕日を眺めていた。

「何してんだよ、俺は」

目の前で輝く夕日に向かって意味なくボソツと呟く。人気の無い公園に俺の呟きが思っていたより響く。うわ、今の誰かに聞かれてたら恥ずかしいな。駄目だ。そろそろ引き上げよう。こんな黄昏れた所、他人に見られたら一生・・・まあ、なんかトラウマとかになるに違いない。うん。

「・・・ん？な、ななな!？」

温めたブランコから重い腰を上げた時に俺は大変なことに気が付いた。なんと少し離れたフェンスによかつて夕日を見てる人がいるではないか！

なんてこった！これ、なに？あれか？黄昏れる人を嘲笑う会とかの刺客か！？チクショウ！このまま奴を逃したら町中に黄昏れたことを広められて町で歩けば指で指され、嘲笑われ、レジでお釣りが全部一円玉で渡されたりするに違いない。どうする、ワイロで口封じをするか？ワイロはやっぱりみかんか？

俺がわたわたと焦っていると黄昏れる人を嘲笑う会の刺客の腰まで

ある長い黒髪が風になびいた。風に踊る髪の間から見える整いすぎた横顔。月光のように白い肌。目が離せなかった。確かに凄まじい美人だ。だけど、目が離せなかった理由はそこじゃない。卑怯だ。あんな……

「俺には幽霊や神様のお告げやらを聞ける能力はない。けどな、目の前で話す人の言葉くらいは聞けるんだ。知ってたか？知らなかっただろ？黄昏れる人を嘲笑う会の刺客よ」

俺はいつの間にかフェンスに背を預け、黄昏れる人を嘲笑う会の刺客の隣で話しかけていた。まったく、あれは反則だ。レッドカードだ。

あんなに……悲しそうな顔するなんぞ卑怯だ。

「黄昏？あなた、誰？」

「黄昏れ隊の隊長。それ以外はプライバシー」

いきなり話しかけたにも関わらずたいして驚かない刺客。やるな。まあ、俺だっぺいきなり話しかけられた位じゃ驚かないさ。たぶん。

「会長？まあ、どうでもいい。それより、私の話し聞くの？後悔するよ？」

「敵に塩を贈るのが俺の流儀だからな。聞いてやるさ」

悲しみを滲ませた双方で一度俺を見る。そして、視線を再び夕日に

向け、刺客はぼつり、ぼつりと語り出した。

「・・・神様つていると思う？」

「いるに決まってる。いなかったら今頃、地球は滅びてる」

「・・・そうかもね」

刺客は隣にいる。確かに隣にいる。だけど、今に消えてしまいそうに見えるのは俺だけだろうか。儂く、脆く、触れただけで崩れ落ちそうな刺客。

「私、家族がいないの。皆、私だけ置いて先にいちゃった。神様がいるのならなんで助けてくれなかったのかな」

「・・・そうか」

何故、私だけ生きてるの？言葉にしくとも紡がれるもう一つの悲しい言葉。胸が締め付けられる。家族がいない。それは、どれほど悲しんだろうか。一人。それは、どれほど辛いのだろうか。

「私、死にたいの」

瞳から宝石のような雫を落しながら、笑顔で願いを語る刺客。普通の人なら、慰めると思う。悲しかったね。ゆっくり心の傷を癒そうね。とでも言うだろう。俺だって言えるのなら慰めてやりたい。だが、それは出来ない。

俺は刺客の頬を平手で叩いた。

パチンと乾いた音が公園に響く。痛い。堪らなく痛む。手ではなく、心が。でも、こうしなければいけない。

「お前は両親を、家族を侮辱しているのに気が付かないのか？」

「なっ！私は侮辱なんてしてない！！」

涙で頬を濡らしながら、瞳には怒りの炎を燈して喚く刺客。こいつは何もわかっていない。

「きっと、お前の両親は一生懸命にお前を育てただろう。だけど、お前は両親の何年もの苦勞と愛情をいとも簡単に捨てようとしている。これを侮辱と呼ばないで何て呼ぶ？」

「ッ！！」

すると、とたんに瞳からは怒りの炎は消え、刺客は力無く座り込む。気付かせなければいけなかった。こいつの為にも、家族の為にも。

そしてそれは、家族を失った同じ立場の俺の役目。

「じゃあ、私は一人でずっと生きていかないといけないの？」

「お前を大切にしてくれる人を探せ。そして、生きる。家族の分も

幸せになれ」

座り込んだ刺客に着ている制服のブレザーを掛ける。少し肌寒いけど男だから我慢。そして、俺は刺客に背を向け歩きだす。刺客が何か言ってるけど完璧無視。

神様は大変忙しい。だから、神様は手の平の上にいる人しか守れないのだ。だから、神様の手の平から落ちた人は、はいつくばっても歩きださないといけない。いくら辛いことがあっても、悲しくても、孤独でも、自分で歩かないといけない。もう、神様は守ってくれないのだから。

刺客は神様の手の平から落ちた。でも、刺客なら立ち上がり、歩いて行ける気がする。なんでかはわからないけどね。直感、直感、第六感ってね。

「負けるなよ」

刺客に聞こえないくらいの小さな声でエールを贈る。もちろん、届く訳もなく、言の葉はヒラヒラと夕焼けの空に溶けて行く。と言うか、初対面の人にビンタして、泣かして、説教する人って世界広しと言えど俺ぐらいじゃないか？うーん、なんだか複雑な心境。俺は足元の小石を蹴飛ばし、俺1人しかいない家へと歩を進めた。

第一話 出会い（後書き）

始めまして。ゆきさだと申します。

この後書きを見てくれる人がいるのか分かりませんが、どうぞ最後までユキサダの駄文小説に付き合ってくださいませ。

第一話はラブコメばく無いです但其の内なっていくので我慢をよろしく願います。

それではまた第二話でお会いしましょう。

第二話 管理人と奴

「ひまあ〜どうあ〜」

リビング、キッチンが一つの部屋で済むコンパクトさと、風呂が無いのが我が家の自慢。その狭い部屋の中を右へ、左へと自由自在に転がり回る暇な俺。

黄昏れる人を嘲笑う会の刺客をビンタし、泣かし、説教してから二日。俺は特に何も無い平和な高校生活を謳歌していた。

「何してんだよ、俺は」

目の前に広がる薄汚い天井に向かいボソツと呟く。狭い空間に俺の呟きが思っていたより響く。

あれ？なんかこの感じ、知ってる気がするのは気のせいか。はたまた五月なのにも関わらず異様に暑い異常気象のせいか。それとも壊れた我が家唯一の扇風機の怨念のせいか。

なんだかとも嫌な予感。もしかしたら、あの黄昏れる人を嘲笑う会の刺客がビンタの腹いせに、グーとかで殴りに来たらどうするべきか。

あー、どうしよう。グーは痛いよ。グーは。

「まあ、そんなわけないよね〜。はは、ははははは・・・はッ!？」

ピロリンつとチャイムにしては珍しい我が家のチャイムが鳴り響く。笑っていた顔の形で動きが止まる。

まさか。いや、考えすぎだ。只の宅配便とか、郵便とか、宅配便と

かに違いない。きっとそうさ。そう易々と住所なんざ分かるはず無いさ。

不規則に暴れる心臓を押さえつけ、重い腰を冷や汗ダラダラで上げる。ゆっくりかつ慎重に扉に近づいていく。

大丈夫。宅配便だと信じるんだ。信じる事から全てが始まるって先生が言ってた気がする。

そして、ゆっくりと玄関の扉をあけると・・・

「宅配便です。はん、う、うわ！あ、あの大丈夫ですか！？あ、汗が凄いですよ！？」

「お、オッケー！オッケー！ば、ばばっちオッケー！！フーイ！！イーイイ！！」

宅配便の人が、もの凄く痛い子を見る目で見ているが構ってはいられない。用意しておいた判子を右ポケットからすばやく取り出す。判子を押ししたら荷物を受け取り、これでもかと言つくらいに扉を思いつき閉めた。

良かった。ホントに良かった。なんだか涙が出てきた。訳分からないう俺。

と言うか、あの超絶美少女がここに来る意味なんて無い。来たところで軽く挨拶してはい、さようならだよ。普通はさ。グーとか有り得ないよ。怖がることも、恐れることも無いさ。

「そつだ、何を俺は恐れているんだ。は、ははは・・・はアッ！！？？」

両手を広げ、高らかに笑い、恐怖を拭い去ろうとした瞬間、本日、二回目のピロリン。

まっ、まさか。嫌な予感が止まらない。不規則どころじゃない、お祭り騒ぎの心臓を放置。息を殺し、ゆっくりと玄関の覗き穴を覗く。そこには・・・

「ーッ!!!」

そこには、いた。クセ一つも無く、腰まで伸びる黒い髪。整いすぎた輪郭。月光に溶ける白い肌。そして今、気がついたが低い身長。奴だ。黄昏れる人を嘲笑う会の刺客。二日前の超絶美少女。俺の高校のブレザーをこのクソ暑い中、涼しそうな顔でしっかりと着用している。

その瞳は二日前の悲しみは消え、生き生きとした光を燈している。

どうする。開けるのか。開けても何を話せばいいんだ。二日前はピントしてゴメンチャイイ・・・ダメだ、なんだか思いつきりゲーで殴られそう。

「闇夜真宮やみよ しんくいる?」

透き通るような美声と共に、控えめに扉をノックする奴。

何故だ。何故に奴は俺の名前を知っているんだ。はッ、まさか制服のポケットに入っていた学生証を見たのか。

アレには男友達ですら見せていない、自分の秘蔵ドアップ写真が入ってるのに。一生の不覚。生き恥だよ。

いやいや。そんな事より、どうするかだ。そうだ、居留守を使おう。どごその三世の泥棒の如く、居留守を使おう。

そうすれば、いずれは諦めて帰るだろう。ゆっくりと音を立てない様に玄関に正座。心頭滅却。さすれば、まあ、いい事あるぞ。

「真宮、いないの？」

いませんよ。いませんとも。ええ、いませんよ。ここにいるのは、闇夜真宮の抜け殻と壊れた扇風機ぐらいなモンです。下の名前を呼び捨てにしたって反応しませんよ。ええ、誰もいませんもの。

「どうした、お嬢さん？真宮に何か用事でもあるのか？」

扉に耳を引っ付ける。玄関の扉の向こうで聞こえる奴とは違う女の声。

うそだ。管理人さんだ。おかしい。何とか集会で今日は帰って来ないって言ったのに。管理人さんは俺が部屋にいること知っている。今、ばらされたらグー、いや、下手したらチヨキでやられる。頼む。管理人さん。俺をここにいないことにしてくれ。

「はい。でも、何回呼んでも出てこないんです。留守なんですか？」

「いや、違うな。ちょっと待ってな」

カツカツと聞こえる足音。ん？なんだか近づいてきてる。だが、少しするとピタリと足音が止んだ。

帰ったのか。それならよかった。その時、扉の方向から凄まじい衝撃がきた。木製の扉を管理人さんの足が貫いた。もちろん、扉の近くにいた俺は木屑と仲良く吹き飛ばす。

「へっくぶあー！」

なんてこった。ありえんでしょ、普通。木製だよ？扉だよ？女の人だよ？えっ、俺がおかしいの。もう今は、木製の扉は蹴破れる時代なの？へー、時代の流れって恐ろしいね。

足を引っ込め、鍵をぶち壊し、堂々と俺の聖域に入ってきた。

モデルさんですら逃げ出す美貌。抜群のプロポーション。流れる長い美しい黒髪。白のTシャツ、黒のズボンにサンダル。恐ろしい程の貫禄。

名前は落葉夕日。彼女は俺が住むこの青影荘あおかげの管理人。そして、俺はナチュナルな動きで土下座スタイル。

「ら、らら落葉様。い、いつお帰りになられたんですか？」

「さつき帰ってきた。あと、いつも言ってるが『夕日さん』って呼べ。分かったか？」

「サー、了解しました！！！」

ビシッと右手を挙げて敬礼。なんとか、お許しを貰えたようだ。夕日さんは何かと俺だけに名前で呼ばしたがるのはやめてほしいな。だって、怖いもん。

「あ、いた」

夕日さんの後ろからひよっこり顔を出した奴は、俺の顔を見るなり顔をパツと輝かせた。

なんてこった見つかっちゃった。やられる。あの顔はチヨキだ。絶対そうだ。ヒイ、目をもっていられる。絶望している俺に奴は、想像を遥かに超える言葉をぶつけた。

「真宮。私も、青影荘に住むことにしたの。よろしくね」

青と白が見事なコントラストを生み出すそんな空。

そんな、人間から見れば無限大に広がる空に俺の『あ』の行の四番目に奇跡の濁点がついて響く。その声は空を越え、天の神様に届く前に空に溶け、儚く散っていった。

第二話 管理人と奴（後書き）

こんにちは。新参者のゆきさだです。

なんだかいきなり二話に入って、作風変わったなあ、なんて思う人が大半を占めたりすると思います。

一話はおしとやかに書いたのので、二話では自分らしい文章で書いたらこうなっただって事です。

どうぞ、皆さんお許しを。

それでは、また三話でお会いしましょう。

第三話 よろしく

「そつ、そんな馬鹿な。ここは、あの青影荘だぞ」

五月の美空が美しい。ポカポカ陽気のそんなよき日。

そんな事はお構いなく、俺は人生でもっとも混乱中。奴の発言にひたすら混乱している。

ここ、青影荘だよ。普通の人なら生活出来ないよ。今に崩れそうな外見。狭い部屋。恐い管理人とか恐い管理人とか、その他諸々。巷で怖いと有名な青影荘。

「うん。知ってる」

嬉しいそんな顔の奴。二日前とは大違い。凄い変化だ。まあ、あの状況から立ち上がったのか。良かった。悲しそうな顔よりも嬉しそうな顔の方が何倍もいい。

でも別に可愛いな、なんて思っていない。断じて思っていない。俺はそんなに軽い男では無いさ。と言うか、奴意外と小さい。身長は140代か。小学生なのか。

「あ、でも、青影荘って満室だぞ」

そうなんです。満室なんです。青影荘には六つの部屋がある。でも、人が住めるような部屋は三つしかない。

残りの三つは、凄くアレなんだよ。もう、言葉に出来ないくらいアしなんだよね。お伽話にもならない位に汚い。

そして、残る三つには俺と管理人さんと、あと1人がもう住んでいるので満室状態。要するに、奴が住むところは無いってこと。

「え？そうなの？」

出たよ。無計画。若さゆえの無計画。何も考えず来ましたが、見たいな顔。凄い行動力は認める。でも、少しは考えないと大人になって大変だろうな。俺が言えたモンじゃないけど。

「そんなモン、お嬢さんもこの部屋に住めばいいんじゃないか」

「え！いいんですか！？」

「ああ、別に構わん」

「はいいいい！？」

堂々と腕を組み、タバコに火をつけながら夕日さんのズバツと一言。それに飛びつき、さっきより嬉しそうな顔をする奴。

いやいや、空耳だよ。流石にそれは無いさ。流石の夕日さんだってそこまでじゃないさ。夕日さん根はいい人だし。

ホントに。扉を蹴破ってくれたりとか。ついでに俺も吹き飛ばしてくれたりとか。ホントいい人。皮肉じゃないよ。本心だよ。チクシヨウ、どうやって扉直すかな。

「あの、夕日さん。今、ちょっと耳に異常があって聞こえなかったんで、もう一回お願いします」

「二人で住めばって言ったんだよ」

タバコを銜えてズバツと一言。違うよ。今のもあの空耳なんだ。うん。空耳。全く最近多いから困るよね。奴は、奴で少し顔を赤く染

めて、両手上げてピヨピヨンしてるし。
何してるのさ。ピンチだよ。今、ピンチッスよ。一つの部屋にぶち
込まれそうなんですよ。

「いや、夕日さん。それは、流石に俺にもプライベートとかありま
してね。ちよっと無理かな？・・・なんて」

「二人で住め。闇夜、分かったな？」

「了解！サー！！夕日元帥の仰せの通りに！！」

タバコを銜えてズバツと一言。じゃなくて、命令。そして、ギラリ
と睨む。反射的に返事しちゃう俺。右で敬礼。腰が低すぎる？当た
り前さ。俺を見くびって貰っては困る。

返事を聞いた夕日さんは満足そうに笑う。普通に笑っていれば綺麗
な人なのに。そんな、気持ちは心の奥底に鎖でグルグル巻きにして
放置。

「んじゃ、まあ頑張れよ」

俺の頭を撫でる夕日さん。いつも、夕日さんは俺の頭を撫でる。子
供では無いのに。満更じゃないけどね。

そして、さつさと元玄関の扉を開けて、トコトコと帰っていった。
いや、この状況どうしたらいいのさ。真宮困っちゃう。

「この前は、ありがとう」

状況打破の為に頭を捻らしていると、いきなり奴が頭を下げ、ゆっ
くりと心を込めるようにして感謝の言葉を口にする。ありがとう、
か。なんか久しぶりに言われたな。

「真宮に言われるまで気付かなかった。家族の苦勞を知らない内に無駄にする所だった」

頭を上げる。光が燈った瞳で俺を見つめる。真つ直ぐ。その言葉がピタリとはまる視線。絶望。そんな物は一つも見当たらない。

「真宮言ったよね。私を大切にしてくれる人を探せって。見つけたよ。私を大切にしてくれる人」

ふわりと微笑む。奴の幸せそうな微笑み。大切にしてくれる人を探せ。俺が奴に言った言葉。そうか。良かった。本当に良かった。生きる希望を見つけたのか。

「私を暗闇から助けてくれた。闇夜真宮。あなたを」

そうか、闇夜真宮って言う人か。奴を大切にしてくれるのは。そうか、そうか。それにしても変わった名前。聞き覚えのある名前。ん？闇夜？真宮？

「ふうあい！？おつ、俺！？」

「そう。真宮」

待つ。待て。待って。待ての三段活用。いや、ほぼ初対面ですよ。ビンタして、泣かして、説教した俺だよ。むしろ憎むべき敵だよ。俺が奴の立場なら殴るね。もちろんグー。チヨキは使う勇気が無い。

「今日から闇夜真宮にお世話になります。煌月里香こうつきりかです。不束者で

すが、よろしくお願いします」

五月の美空は透き通り、果てしなく青い空の下。

青影荘のある部屋に新しい仲間が加わった。少女が絶望から立ち上がり、見つけた希望の少年。その出会いは予期せぬ偶然から生まれた出会いなのか、それとも、神様の手の平から落ちた者同士の引き付けにより、必然に生まれた出会いなのか。

それは、誰にもわからない。いつか、神様が教えてくれる時が来るまで、楽しみにとおこつと青年は少女と握手をしながらそう思った。

第三話 よろしく(後書き)

皆さん、こんにちは。暑さにうな垂れるゆきさだです。

ここで、皆さんに重大発表！ジャカジャカジャーン！

祝1000アクセス達成！イエーイ！

皆さん、ご愛読ありがとうございます。

未熟者のゆきさだですが、これからも精進いたしたいと思っておりますので、どうか、暖かい目で見守ってやってください。

それではまた、第四話でお会いしましょう。

第四話 俺の誓い

「えっと、知っていると思うけど俺は、闇夜真宮。よろしくね、煌月ちゃん」

握手を済ませて、自己紹介。ほぼ初対面だしちゃん付け。今までコロコロと事が運んでじっくり見なかったこいつを改めて見つめ直す。俺の胸あたりしか無い身長。幼さの残るが整った輪郭。腰まである黒髪。少し大きい俺のブレザーから覗く、白く透ける肌。パツチリした瞳。

いや、可愛いな、なんて思ってないよ。ホントに。

「ちゃんって、九歳だし、もうそんな年じゃない。里香って呼んで子供扱いされたのが嫌だったのか、少しむっとした顔。近くに近づいて俺を見上げる。だが、ほぼ初対面の人を呼び捨てにする礼儀知らずでは無い。それは、胸が張れる。初対面の人を呼び捨てとかいけませんって先生言ってたし。たぶん。

「いや、煌月ちゃん。それはちよ」

「里香」

「いや、だからさ、それちよ」

「里香」

「……よろしく、り、里香」

「うん、よろしく！」

じゅっと見つめられ、俺が折れる。負けました。六歳下に言い負けました。だって無理だよ。下から上目遣いだよ。そして、名前を呼ぶとパツと輝く笑顔に。こいつ。天然でこんな事やってるんなら将来、魔性の女になっちゃうよ。男泣かせのプロになるよ。絶対。

ふと時計に目をやる。すると、夕食の時間をとっくに過ぎていた。ごたごたしている内にこんなにも時間が経ったのか。時間の流れってこういう時だけ速いんだよね。

夕食か。どうしようか。俺だけなら、夕食の一つや二つ抜いたところで問題ないけど、煌月ちゃんこと里香がいてはそうもいかない。九歳。育ち盛りの子供には食事は大切。「お腹空いたか？」と訊く。うん、と少し悩んだ結果、「うん」と頷いた。

「よっし。今日は、特製闇夜スペシャルを作ってやろう」

「闇夜スペシャル？なに、なに？それ？」

「フツ、フツ、フツ。それは出来てからの楽しみだ」

手早くエプロン装着。背中に期待の視線をビシビシ感じながら、台所に向かう。材料やらフライパンやらを用意して手際よく調理開始。腹を空かせた里香の為になるべく早く作る。スパパ、パツパ、パパパツパつとね。

「真宮」

「んん？どうしたん？」

「・・・私。ここに、いてもいいのかな？」

ついさつきまで明るい声だった里香が、急に暗い声を出す。コン口の火を消し、里香の方へ向き直す。そこには不安そうな顔をする里香がいた。

何かを怖がるような瞳。わずかに震える小さな体。

そっくりだ。昔、俺がこの青影荘に来た時と。怖がっている。人と親しくなることを。再び、失う事を。キリキリと痛いくらいにわかる気持ち。

同じ境遇だからこそ、わかる。失うことの恐ろしさを。

俺は不安そうな里香にゆっくりと近づき、出来る限りの優しさを込めて抱きしめた。とにかく心を込めた。初めは体を強張らせていたが、次第に力を抜いていった。

「大丈夫。もう、お前は1人じゃない」

「うん」

「お前を置いて、俺はどこにも行かない」

「うん」

「そうだな、闇夜の名に誓う。だから俺しかいない時は・・・泣くのを我慢するな」

「・・・うん」

俺の言葉を口火に里香は大声で泣き出した。俺の胸に顔を埋め、ギョツと服を握り、ひたすらに涙を零す。小さく震える背中を優しく撫でる。

少しでも、和らげたかった。この小さな体では大きすぎる家族を失った辛さ、悲しみ、苦しみを。

「しん……くう……わ、わた……しい……」

伝わってくる。例え言葉に出来てなくとも、他の誰にはわからずとも、俺には伝わってくる。寂しかった。一人は寂しかった。悲痛の叫びが聞こえる。

辛いよな。わかるよ、お前の悲しみ。でも、もう一人じゃないぞ。俺がいるぞ。

まったく。ホントに現実って厳しい。こんなにも小さい女の子にも容赦なんて無い。大切な家族を奪って、居場所を奪って、生きる希望を奪って。まったく容赦が無い。

そして、この小さな子には現実に対抗する力が無い。ほっておけば現実に押しつぶされてしまっただろう。

だが、そうはさせない。俺が現実からこの子を守ってやるさ。この子の家族の代わりに。この子が俺の助けを必要としなくなるまで、この子の傍にしよう。

例え、出会って時間が経っていなくとも、何かの縁さ。馬鹿らしいって言われるかも。でも、関係ない。俺は守る。俺の胸で泣く、この小さな子を。

胸で、未だに収まらない涙を流す里香の頭を撫でながら、俺は心の中ですう誓った。そう、誓ったんだ。

第四話 俺の誓い（後書き）

皆さん、こんばんわ。足が筋肉痛のゆきさだです。

と、いきなり重大発表！またかよとか思ったら負けですよ。ジャカジャカジャーン

祝2000アクセス達成！皆さん、ありがとうございます。

いちいち1000アクセスずつで発表していきますよ。そりゃ小心者ですから。

と言う事で、これからもご愛読お願いいたします。

それではまた、五話でお会いしましょう。

第五話 あったかい

あれからひとしきり泣いた里香。今はどうやら落ち着いたご様子。落ち込んだままだろうと思ったが、意外にも里香は幸せそうに笑っていた。まったく、切り替えが早いね。

「あのさ里香。このままじゃ、料理作りにくいから放してくれないか」

「いゝや」

「いや、火とか危ないからさ」

「ふふ、いゝや」

俺は台所に立って、闇夜スペシャルを作っている。手際よく作り、里香に早く食べさせてやりたいのだがそうもいかない。その原因は里香が俺の背中にピッタリ抱きついていてからだ。

やんわりと放してと言ってみるが、即却下。幸せそうに微笑む里香を無理矢理引き剥がすのも気が引ける。なので仕方なくそのままにさせておく。

俺が引き剥がさないと分かったのか、里香はさっきより嬉しそうに強く抱きつく。むう。少し動きづらいけどまあ、里香が笑ってんだから我慢するか。

「よゝし、出来たぞ」

出来立ての料理を部屋の真ん中にある、丸いちゃぶ台に並べて、里

香の箸を俺と向き合う位置に置いてセッティング完了。だが里香はうっん、と難しい顔して唸っている。

「どうした？どっか痛いのか？」

聞いてみるが首を横に振る里香。一体どうしたんだろう。まさか、闇夜スペシャルが気に入らなかったのだろうか。

そんなことを思っていると里香が「あっ、そうだ！」と手をポンと叩く。いきなり箸を掴んだ里香は、あぐらで座る俺の膝の上に腰を下ろした。

「……えっと、どういうこと？」

「私、ここで食べる」

「別にここじゃなくてもいいだろ」

「真宮と離れたくないもん。だめ？」

「……はあ。まあ、いいよ」

「やった！」

ちよつど顎の辺りに里香の頭があり、嬉しそうな顔で俺を見上げる。里香はせつせと自分のお腹にシートベルトのように俺の両手を巻く。ころころと微笑み、俺の腕に頬をすり寄せ、幸せそうに目を細める。なんで里香はこんなに上機嫌なんだろう。むう、子供心は難しいな。

「ほら里香、両手合わせろ。はい、いただきます」

「いただきます！」

少し大きいジャガイモを里香が食べやすいように、箸で小さく切る。それをちよんちよんと、里香の小さな箸が掴む。

口に闇夜スペシャルを入れると里香が更に顔を輝かせ、もぐもぐと頬張る。気に入ったみたいで、ホッと一安心。嫌いな物とか今度聞いておこう。

「真宮、真宮。はい、あ〜んして」

「いや、いって」

「いいから、あ〜んしてってば」

「・・・あ、あ〜ん」

里香が箸に程よく冷めたジャガイモを取り、俺の顔の前に持つてくる。目をキラキラ輝かして、凄く期待した顔。

少しは抵抗したけど、そんな目で見られたら言うことを聞いてあげなくなる。いや、頑張っただけ抵抗したつもりだ。でも、結局は俺の負け。

仕方なく里香が差し出すジャガイモを口に入れた。うん。うまい。我ながら良く出来てる。完璧だね。

それを見て満足そうに微笑む里香。それにつられて俺も微笑んだ。懐かしい安らぎ。あったかい。柔らかな里香の頬をフニフニと触りながら俺はそう思った。

その後も、何度も里香のあぐん攻撃を受けながら夕食を終え、今は食器を洗っている。

里香は眠たいのかウトウトしながらも、俺の背中にしつかりとくっついて離れようとしなない。

すでに、時計の針は十時を指している。九歳の里香には眠たい時間だろう。このまま、力が抜けて倒れたら危ないので、脇の下に手を入れ、里香を持ち上げる。

すると、よほど眠たかったのだろう。俺の首に両手を回し、頭を肩に乗せ、すぐにすやすやと寝息を立て始めた。

「・・・しん・・・くう・・・」

むにゃむにゃと寝言を言う里香。食器を洗い終えた俺は里香の頭を撫でる。なんだか娘を持った父親の気持ちが良いわかるよ。この年で。なんかオツサン臭いね、俺。

里香を片手で持ち、ちゃぶ台を端によせ、そこに布団を二つ引く。ゆっくりと里香を起こさないように布団に寝かせ、掛け布団をかけてやる。

里香の幸せそうな寝顔を見て、勝手に頬が緩んでいく。

「ふあ〜」

いつもなら、睡魔が襲って来ない時間帯だが、眠たい。はあ、今日は色々あって疲れた。欠伸を噛み殺しながら、部屋の電気を消し、里香の隣に敷いた布団に入る。

明日も忙しくなりそうだ。まあ、たまにはこんな日があっても悪く無いかな。そして俺はゆっくりと真っ黒な暗闇に意識を手放した。

第五話 あったかい（後書き）

皆さん、こんにちは。更新が遅れたのを学校の所為にしようと考えているゆきささです。

いや、この時期の学校は大変です。大変なんです。いや、本当ですよ。言い訳してるんじゃないですよ。

まあ無事、五話を更新できて一安心です。ご愛読されている方がいられるかわかりませんが、申し訳ありませんでした。

もつと精進せねばですよ。

それでは皆さん、また六話でお会いしましょう。

補足。祝3000アクセス突破！

皆さん、ご愛読本当にありがとうございます。もし、良いところ、悪いところがありましたらぜひご評価してください。これからも温かい目で見守ってやってください。

第六話 行ってきます

日が昇る。夜の終わり、朝が始まる。

すうっと自然と目が覚めた。この、目覚まし時計を使わずに起きれると言うのが俺の特技だったりする。

欠伸を一つして、カーテンの隙間から零れる光に目を細める。どうやら今日もいい天気。

何故だか良く寝れたようで寝起きがいい。

清々しい朝つてのはこう言う朝を言うんだろう。そう思いながら体を伸ばそうとすると、体に違和感を感じた。

なんだ。体が少し動かし難いぞ。なんだか、腹の辺りに何かがかくっついているような感じ。

「まさか、な」

まさかと思い、隣の布団を見るとものの抜け殻。そして、俺の腹の辺りにもう一つの小さな山。布団の中から聞こえるすうすうと言う寝息。まさかだ。そのまさかだ。

正体不明の、いや分かってはいるけど、もう一つの山が何なのか確認のために布団をゆっくりめくってみる。

「・・・なんでここで寝てんだか」

予想通り。里香がいた。俺にがちり抱きついて、幸せそうな顔で寝息を立てている。

「まったく、そんな顔されたら文句が言えないじゃないか」

頬が緩んでるんだろうな、と思いながら里香の流れるような髪を梳く。それにしてもいつの間にも俺の布団に入ったのだろう。普通なら寝難さで目が覚めてもいいんだけど、むしろ良く寝れてる。不思議だ。これも子供だから、なせる技か。

「まあ、いいか。えっと、今、八時か。・・・八時ツ!？」

「ふわ! な、なに?」

里香が寝ているのを忘れて大きな声を出してしまった。だが、里香には悪いが急がないともう、八時だ。学校が始まるのが八時半。登校するのに三十五分。準備時間はたった五分しかない。セーフラインぎりぎりだよ。

「やばい、遅刻する!」

「ふ、ふい!？」

事態を飲み込めていない里香の頭を撫でて、俺は急いで身支度を始める。歯を磨いて、顔を洗う。寝癖が着いているが、かまってられるか。

わたわたと準備をしていると里香の朝ごはんが無いことに気がつく。と言っか、里香も学校じゃないのか。

「りふあ、がふおうは?」

「き、今日は休み」

ネクタイを口に咥えながら、カッターシャツを着る。言葉が変になったが伝わったようだ。そうか、今日休みか。なんて羨ましい。

そんなことを考えている内にもどんどんとタイムリミットは近づいてくる。いけない、いけない。これじゃあ、皆勤賞が無くなってしまう。

「里香。済まないけど、俺が帰ってくるまで夕日さんのところに来てくれないか？里香一人じゃ俺が心配で学校に行けないからさ」

「うん。わかった」

「よし！じゃあ、行くぞ！」

里香の脇の下に手を入れて抱き抱えて、部屋を出る。鍵は閉めない。どうせ盗られて困るもんなんて置いて無いしな。

俺の部屋がある二階から一階までの階段を駆け下り、夕日さんの部屋をノックする。

「はい、どちらさん、って真宮か。どうした？」

「あの、夕日さん。俺が学校に行っている間、里香を預かってくれませんか？」

ドアが開くと出てくる、いつ見ても綺麗な人。寝癖も無く、眠たそうな表情は微塵も無い。朝だと言うのに非の打ち所が無い夕日さん。見ていたいのも山々だけど、時間が無いので単刀直入に話に入る。いきなりな話した。もしかしたら、夕日さんも用事があったってダメかもしれない。

そうすると、どうするかな。まあ、そうなったら俺が学校休めばいいか。

「ああ、全然いいよ。むしろ私もこの子と話しがしたかったんだ」

「本当ですか！ありがとうございます！」

なにやら里香に興味があるようだが、どの理由を聞いていられるほど時間は無い。持ち上げている里香を下ろそうとする、あれ、離れない。

「里香？どうした？」

「・・・離れたくない」

「すぐ帰ってくるから、な？」

「真宮と一緒にいい」

嬉しそうに両手をがっちり俺の首に回し、離れないようにしている。だが、流石に昨日とは違い学校があるので離れて貰わないと困る。学校に連れて行くなんてもっての他だ。うむ、どうしたものか。考えた結果、一つ思いついた。

「じゃあ、離してくれたら今週の休みにずっと一緒にいてやろう」

「え！ほんと!？」

「ああ、本当だ。朝から晩まで一緒にいてあげるが、さあ、どうする？」

里香はパツと顔を輝かせた後にうん、と少し悩んだ。そして少しすると両手の力を緩めてくれた。ゆっくりと下ろすと名残惜しそうな顔をする里香の頭を撫でてやる。

気持ち良さそうに目を細めてころころと微笑む。うん、子供は素直が一番。里香に貸していた制服のブレザーを返してもらい、夕日さんに頭を下げる。

「夕日さん。里香をお願いします」

「任しとけ。お前も勉強ちゃんとしろよ？」

「はは、まあ頑張ってみます」

優しく微笑みながら俺の頭を撫でる夕日さん。なんだか幸せそうなのは気のせいかな。俺の制服の乱れを整え、満足そうに頷く。

「よし。行って来い真宮」

「じゃあ、行ってきます」

「真宮。早く帰って来てね」

「オツケ。里香もいい子にしてるよ？」

「うん！」

夕日さんと里香に見送られながら、俺は自転車に乗り込み青影荘を後にした。俺の姿が見えなくなるまで手を振る里香を見てついつい微笑む。なんだろう？心が軽い。何でも出来そうだ。

ぐいぐい進む自転車に乗り、学校へと急ぐ。ブレザーを着ると里香の匂いがした。不思議と心が落ち着く。まったく、里香は不思議だらけだな。

気分良く空を見上げる。どしゃぶり今日はいい日にならそう。曇り
つ無い空を見て俺はそう思った。

第六話 行ってきます（後書き）

皆さんこんにちは。浮かれに浮かれているゆきさだです。

浮かれています。そりゃ、浮かれますよ。なぜなら・・・

初めてご評価して貰ったんです！嬉し涙で前なんか見えませんよ。

ご評価してくださった月奏様には感謝しきれません。

そう言う訳で浮かれているゆきさだでした。

それでは皆さん。また七話でお会いしましょう。

祝5000アクセス突破！

皆さん、本当にありがとうございます。

もっともっと読みたくなる様な小説を書けるよう頑張りますので、どうかこれからもよろしくお願いします。もし、悪いところ、良いところなどありましたら気軽に書きください。

第七話 クラスメイト

多分、今朝は生きてきた中で一番忙しい朝だったよ。里香と夕日さんに見送られた後、学校まで上り坂だろうが下り坂だろうが、休むことなく立ち漕ぎで駆け抜けたんだよ。あんなのが毎日続いたら確実に倒れるね。

そりゃ、疲れますよ。まあ、そのお陰でチャイムが鳴り終わると同時に教室に着けたんだけど、でもその代償が大きいよ。もう、体ガタガタで授業どころじゃないよ。

「・・・つ、疲れた」

「お、おはよう。し、真宮くん」

「はい？」

過労による瀕死状態で突っ伏していると何処からともなく、優しく柔らかい声が俺を呼んだ。
疲れて体ごと動かすのが辛いので、顔だけを動かして隣の机を見るとそこには見慣れた美少女の姿。

「ああ、真由まゆか。おはよう」

「お、おおお、おはようー！」

頬をかぁ、つと赤く染める彼女の名前は水空真由みずそらまゆ。

肩までの黒髪で大きな瞳。それでもって人を和ませる柔らかい笑顔。その上、素直な性格なので男女問わず人気がある。そんな真由と俺

は小学生の頃からの知り合いで、いわゆる幼馴染ってやつ。

今の高校一年までずっと同じクラスで、色々と話す機会も多い。なので、この学校の女の子では一番中が良かったりするんだよね。そのお陰で色々苦労したよ。嫉妬とか嫉妬とか嫉妬とかね。ふっ、人間って怖いよね。

「あ、あの、真宮くん」

「うん？」

「えっと。きつ、今日も、その。あの・・・」

「どうした？」

顔を真っ赤に染めてもじもじしている真由。なに？俺といるのがそんなに恥ずかしい？そうだったら軽くシヨックだよ。

「かつ、か、かかかつこ、かつこ・・・」

「かつこ？なに？鳥？」

「真宮くん今日も・・・か、格好いいね！..」

「どうぶ！..」

か、可愛い！なんてこった。恥ずかしそうに俯きながら頬を真っ赤にしている真由。お、恐るべし可愛さ。やばい！手が勝手に真由の頭を撫でようと動いてる！

「ま、ままゆゆ……。ぬはっ！殺気！？」

俺は手を真由に伸ばして行くとたん感じ取った。な、なんだ、この禍々しい気は！？

バツと、周りを見渡すと男子の肉食獣のような視線。この穴が空きそうな視線、殺されかねない！

あ、危なかった。もし、真由の撫でていたら……。確実に食われてたあ！

「し、真宮くん？顔色わるいよ？」

「き、気にならない！違う！気にしなくてもよいい！」

心配そうな表情をする真由。ちょ、ちよつと真由さん、顔近づけないで！はっ、周りの視線が痛い！視線で穴が空く。

助けて……。待てよ。この状況、誰が助けてくれんのさ？誰でも良から助けてえ！

「熱は無いみただけど……」

「なすうううい！！！」

俺の額に真由の手が触れた。それと同時に俺は叫びながら、教室の一番後ろまでずり下がる。

何故そんなに大胆なの真由さん！？いつもはしないじゃん！あえて？この状況だからあえてやったの？き、来た！男子達、いや肉食獣達が来たあ！命獲られる！

「く、来るな！ドントタッチミィー！！！」

「闇夜よ。貴様は少々遊びすぎた・・・」

肉食獣達が凄まじい気迫と殺気を携えて迫って来る。なにその喋り方ってもうどうでもいい！か、狩られる。もう駄目？

「おゝい。ホームルーム始めるぞ」

その時、集団ヒステリーな教室に入って来たのは先生いや・・・救世主だった。

肉食獣達は俺を舐めるように睨み、舌打をしつつ自分の席に帰って行く。

助かった。生きてる！？ヤツハウ生きてるう！この気持ち先生いや、救世主様に伝えましょう。ええ、そうしましょう！

とうつと救世主様の前で土下座しようとして俺は考えた。

ちよつと待て。そんなことしたら明日から学校で変態扱いされやしないかい？先生にいきなり土下座する変態・・・うん、土下座やめた。心の中でやっところ。だってまだ学校いきたいもん！

「真宮くん。だ、大丈夫？」

席に着くと真由が心配そうに声をかけて来た。君があんなことしなかつたら、ならなかつたんだよ？なんて口が裂けても言えない。

「だいじょうぶい」

再び机に突っ伏しながらブイサイン。真由さん、古いつすなんて思わないでね。

ああ、なんか眠たくなってきた。朝からへビーなことが起こりすぎて眠たくなってきた。だめだ、寝たらお迎えが・・・。

なんて思ったものの、睡魔と闘うことなく俺は意識を暗闇に持って

いかれたのであった。

第七話 クラスメイト（後書き）

はい・・・こんにちはゆきさだです。

調子が滅茶苦茶悪いです。そりゃ、すごい悪いです。小説を書く調子の事ですけどね。

ダメだ！こんなんじゃないダメなんだああ！！

この壁、読者の皆さんの為に乗り越えなくては！

もう、頑張ります。頑張りますよ。

あ、月奏様のお言葉は助けになってます。本当にありがとうございます！

それでは皆さん、また八話でお会いしましょう。

祝8000アクセス突破！！

皆さん本当にありがとうございます！

第八話 手作り弁当のち親友

あんまり眠たいから朝一から居眠り計画を企てたんです。

が、そんな暴挙を我がクラスの担任が見逃すわけなく、出席簿アタックで阻止されて、ヒリヒリと痛む頭を撫でながら一睡もせず午前中の授業が終わっちゃったんだよね。

出席簿の角って酷いよね。普通の人なら血出てるよ。

でも、そんなことはもういいのです。何故なら昼だからさ！

やれ角で叩かれたやら、やれ血が出ただの言ってる場合じゃないわ！それより購買だよ！俺の大好きなアップルパイの元へ行かなくては！

「フウフィー！アツポオーパイ待ってて・・・ん？」

愛しのアップルパイの元に走り出そうとすると、真由に服の袖をちよんちよんと引っ張られた。

いやね、真由ならいつでも話しかけてくれても良いんだけどね、そんな可愛い事してくれると出ちゃうよ？・・・鼻血が。

「あ、あの。真宮くんっていつもお昼ご飯購買で買ってるよね？」

「そうだけど？」

「今日もお昼ご飯購買で買うの？」

「そつともね」

勿論、買いますよ。アップパイをね。アップパイとも言っけどね。

「そ、それなら。こっ、これ、一緒に食べない・・・？」

恥ずかしそうに俯く真由の右手には、可愛らしいチエック柄の布で包まれた・・・

「そ、それはああ！？まさか、べ、べんトウでは！？」

「う、うん。作ったんだ」

作った。作っちゃった！？真由さんが？我が高校のアイドル的存在の真由さんが？誰に？俺に？まさか。まさかね。

でも、聞いてみるくらいいいよね。自惚れじゃないよ。あの、あれだよ。そう、確認って奴さ！

「伺いますけど、そ、それって、まさか・・・」

「し、真宮くんの分・・・」

えっと、つまりね。お弁当があつて、一緒に食べよう・・・なるほど。そして、真由が俺に弁当を作ってくれて、俺が食べる・・・うんうん。真由の手作り弁当・・・

「神よ！神よありがとうー！」

両手を空に広げ神様に感謝。ふふ、俺ったら嬉しさで涙が出ちゃう！

「ダメかな？」

「真由様の為ならお供いたしまする！」

不安そうに上目遣いで俺を見る真由に即答。そして片膝を床に付け、真由の手の甲にお礼のキスをプレゼント。

「ちょー！し、真宮くん!？」

「どうしました姫様？」

「ひ、姫!？」

顔が真っ赤になっている真由を一旦置いて、真由の席に俺の席を正面で向き合う様にくつつける。これで俺と真由の楽しいランチ空間の出来上がり。

いいね。真由の食べる姿を見ながら真由の弁当を食べる・・・た、たまらん。

「ささ、座って座って!！」

さあさあ、どうぞと真由を席に着かせ向かい合う。真っ赤になって俯く真由を観察するのもいいけど、この手作り弁当が非常に気になるわけよ。よし、頂いちゃおう!

「それじゃ、いただきます!！」

「ちよつと待ったあああ!！」

真由手作り弁当に手をつけよとした瞬間、教室のドアが開かれた。なにさ?今からいい所なのに!・・・ん?この声はまさか!?

スバつと体をドアに向けるとそこには仁王立ちをしている馬鹿がいた。いや、馬鹿は止めとく。人を悪く言うのはいけないからね。アホが立っていたでいいや。

「真宮う！お前、お前つて奴はあ、親友の俺こと雪城一輝ゆきしろ いっしきを見捨てて、可愛い幼馴染を取るのか！？」

叫ぶなよ！恥ずかしいから！クラスメイトズが皆、注目してるよ。ほら「え？何さあんた？」って目で見られてるよ。恥ずかしい。略してハズイ！

「い、一輝？今、そんな空気じゃないからさ、もう少し静かにしても良くない？」

「宜しくありませんわよ！可愛い子とランチタイムなんて羨ましい！・・・あ、いやいや今の無し。兎に角、親友を見捨てる奴には天誅！」
本音でちゃった！いや、気持ちは分かるよ。俺だつてお前が可愛い子とランチしてたら腹立ちますもん。でも、ですわよは気持ち悪いわ！

「食らえ裏切り者お！ネオ・ドロップキックオー！！」

クラスメイトズが「ネオつてなに？」とか言ってるけど、それ聞いちゃダメ！。勢いとかだからさ、冷静に考えてあげないで！

一輝は助走を付けて空中へ羽ばたいた。華麗に空中を舞い俺に近づいてくる。飛んでくる一輝を目の前にしながらも俺は優雅に少しだけ横に動く。

すると飛んでネオ・なんちゃらを食らわせようとしていた一輝は俺

がもといた場所を通り派手に床に突っ込んだ。床は痛いよ。コンクリだもんね。硬いよ、コンクリの野郎は。

「がくふう！・・・強くなつたな真宮よ」

「いや、別に」

「あれ？今の俺の話に乗ってくる雰囲気でしょ？」

「いや、別に」

「やめてえ！その愛の無いリアクション寂しいから！」

ズザと俺に縋り付いてくる一輝さん。男にそんな涙目で上目遣いされてもなんとも思わんわ！

てか、あんだだけ激しく落ちて痛くないの？ちょ一輝、期待した目で見るなよ！その流れには乗りませんよ！？・・・ああ、もう！乗ればいいんだろ！

「ハッ。かつての友、一輝よ。お前にこの子を超える魅力があると思っっているのかああ！！」

「ぐふあ！む、ムリだ。俺では我らが学園のアイドルに勝てるはずがない・・・ふっ、完敗だ。この借りはいつか返すぜ。あばよ！」

勝手に話を完結させて、すたこらと走って教室を出て行く一輝さん。ちよい待って。あれ？どうすんのこの空気？クラスの皆でこつち向くのやめてくれないかな？いや、どうにかしろ見たいな目で見ても無理だつて！絶対無理！

ブンブンと顔を横に振るもののクラスメイトズの熱い視線は止まらない。分かったよ！やればいいんだろ！？こうなりや、やけばっただよ！

「手を合わせて戴きますを言いましょ！はい、いただきますう！」

教卓に上がって両手を合わせて大声で叫んでやったわ！どうだ、これで満足でしょうよ！？

予想していた通りにクラスメイトズは俺を一瞬寒気がするほどの冷たい目で見えて、ガヤガヤとしたいつもの雰囲気に戻った。

ついでに廊下で偶然、居合わせた他のクラスの生徒にも冷たい目で見られた。あれ？なんだか大切な物が一つ無くなった気がする。

ははは、俺決めました。

・・・一輝殴る！

第八話 手作り弁当のち親友（後書き）

皆さんこんにちは。

あまりの暑さにぐったりしているゆきさだです。

今回も何とか更新できました！よかったです！本当にもう調子が悪いのが直らなくて困っちゃいます。ピンチピンチの大ピンチです。

そんな中のご評価は本当に励みになります。月奏様には本当に感謝感謝です！

本来ならば週一か週二のペースで更新したいんですけど、まだまだゆきさだの力量せいで更新遅くなってしまい誠に申し訳ありません！出来るだけ早く更新して行けるよう精一杯の努力をしていますので、どうぞお許してください。

出来れば今度の土曜日には更新したいと思っていますので温かい目で見守ってやってください。

それでは皆さん、また九話でお会いしましょう！

祝12000アクセス突破！

皆さん本当にご愛読ありがとうございます！

これからもどうぞご愛読お願いいたします！

第九話 荷台の上で霸道を叫ぶ

学校が終わって俺は自転車に乗ってスピディーかつ滑らかに帰宅しちゃってます。里香が待っているんだ、早く帰らないとね。あと門限までに帰らないと夕日さんに殺されるからね！

さつきから思っていたんだけどペダルが重い。いつもよりスピードが乗らなくない？自転車の荷台が重たい気がするし。おっと？なんだか後ろに人の気配。

「ってなんでお前がなんだよ!？」

「ふふ、俺達って親友・・・じゃん？」

ハツとして後ろを見てみれば一輝が荷台に腕を組んで威風堂々と立っている。荷台に、立っている。・・・荷台に立っている？

ええええ！立つちゃってるよ！自転車走ってたんだよ？どんだけバランスとるの上手いんだよ！ってか、なにそのすかした感じ。え？「別にいい・・・じゃん？」うっさい！ムダに腹立つわ！

「ヒヤッホオ〜！行け真宮号よお！俺ら二人の霸道は誰にも止めれぬわあ！！退かぬ！媚びぬ！省みぬう〜！」

「うるさい！必殺急ブレーキ！」

「おいちよ！ちょい待ちへぶんツ！」

一輝がなんか言ってるけどお構いなしに急ブレーキをかける。勿論、

荷台に立っているアホは急ブレーキに耐え切れず前に吹っ飛び地面に突っ込んだ。

ちよい待ちへぶんってどんなヘブンだよ。て言うか、一輝さん最近よく飛んだりぶつかったりしますね。なに？マイブーム？最近流行ってんの？

「ちよつとちよつと！後ろに親友乗せてるのに急ブレーキなんて非常識ですわよ！お母さんはそんな子に育てた覚えはありませんことよ！？」

「人の荷台に勝手に立ってる方が非常識なんですう。て言うかあ、走ってる自転車の荷台に立ってる自体が非常識ですう・・・ってまた乗ってくんないよ！」

「頼む！俺今日自転車無いんだよ。だから連れて帰ってくれ！」

オバサマ言葉でプリプリ怒りながらも再び荷台に乗ってくる一輝。いや、自転車無いのに朝どうやって来たんだよ。一輝のトコのお母さんは車で送ってなんかくれそうに無いし。

まさか歩いてきたの！？片道一時間四十五分を歩いてきたの！？感動した！感動したから、昼のこと許してやる！

「いや、朝はバスだったんだけど帰りの分の金が無くてっさ。一輝ちゃんうつかりっち！でもバスって楽だよな」

はいさっきの言葉、前言撤回ね。もう台無しだよ。感動台無し。「はは」って爽やかに笑いやがって、こんな奴なんぞ荷台からけり落としてやるわ！

「痛ッ！な、なにすんだよ！？」

「うっさいわ！バスなんて使いやがって、もう台無し！感動台無し！」

「へ？感動？台無し？どないこと？」

一輝は事態が飲み込めなくて首を傾げているけど知りません。昼間の復讐も兼ねて置いて帰ってやる。

「一輝、君の事は忘れない！あばブホオ！」

「させんわ！お前だけ早く帰らすものかあ！」

自転車を漕ぎ出そうと思いつきり足に力を入れた。ビュンと加速がついて一輝置いてけぼり作戦が成功したと思った。

が、地べたに座っている一輝を見下した瞬間、一輝に突然荷台を掴また。いきなり荷台を掴まれて自転車漕げるほど自転車マスターじゃないですよ。

それはもう俺はズザザッと派手にこけた。すごい痛いね。けどその前に恥ずかしい！周りの人がすごい見てるよ！その女の子！こっち見て笑いながらこそこそするの話はやめなさい！

「ふっふっふ、逃がさんぞお。さあさあ、観念して俺を家まで送るがグヘア！」

一輝は俺の両肩を掴んで不敵な笑みを零していたのだが、ビュンと風が裂く音が聞こえたと思うといつの間にか一輝が視界から消えていた。

その消えた一輝の代わりに目の前に見惚れてし舞うくらいの袴姿の

美女が立っていた。

「私の真さんに仇名す敵は成敗します！」

第九話 荷台の上で覇道を叫ぶ（後書き）

皆さんこんにちわ。

すぐ目の前まで来ている夏休みの所為でテンションが上がrippなしのゆきさだです。

いきなりここで重大発表！

な、なんと・・・

『俺は君のもの！？』が学園のジャンルでランキング入りしました！
やりました！やっちゃいましたよ！

もう、感動感動です。まさかランキングに食い込めるなど夢にも思
ってなかったのでランキングに『俺は君のもの！？』のタイトルが
書いてあった時は目を疑いましたよ。

57

これも皆さんのお陰です。本当にありがとうございます。
特に月奏様と黒卵様には励ましのお言葉を頂き本当に感謝してもし
きれないくらいです。

これからも一生懸命に頑張りますのでどうぞ、温かい目で見守って
やってください。

それでは皆さんまた十話でお会いしましょう。

祝15000アクセス突破！

皆さん本当にご愛読ありがとうございます。

これからも日々精進して行きますのどうぞよろしく願います。

第十話 夕日に佇んだりしなかつたり

風に長い黒髪を踊らし、一輝が飛んでいったであろう方向を厳しい顔つきで睨んでいる袴姿の美女。

一方吹っ飛ばされた一輝は頭から地面に突き刺さったままピクリともしない。すごいよ一輝。あんたすごいよ。地面に頭から突き刺さるなんて普通の人じゃ出来ないよ。

そんなこの世の思えない状況の中、俺はゆっくり尚且つ慎重に忍び足でその場を離れようとしていた。バスに乗って学校に来る一輝なんてもうほっておいて早く逃げなくては。

焦るな俺。幸い今あの人は一輝の方へ意識が行っている。このまま行けば気付かれずに逃げ切れる。でもこんな人が多い場所である人に見つかるなんて大失敗だよ。なんせこの人は――

「真さん！」

「うわっ！ばれたかってちょ、桐生きりゅうさん何やってるんですか！」

「ん〜？愛しの真さんに抱きついてるんです」

袴姿の美少こと桐生きりゅう可憐かれんさんはがら空きだった俺の背中に飛びついてきた。

そして隙間一ミリも無く俺にピッタリと抱きつくところこの世の幸せをここだけに集めました見たいな笑顔の花を咲かせる。

はあ、やっぱりね。見つければこうなる事は分かりきってっただけだね。普段は和風美人って感じな桐生さん。だが何故か俺にだけこん

な風に所構わず抱きついたりしてくる困った人なのだ。
でも嫌ってわけじゃ無い。そりゃ少しは嬉しかったりする。仕方ないじゃん！男子高校生だもん！

「ちょ、周りの人が見てますから桐生さん離れてくれませんか？」

「だぐめ。こうやってけん制しとかないと私の真さんに悪い虫が寄ってきちゃいますからね」

背中からすると俺から離れず器用に胸に移動した桐生さん。息を大きく吐き、瞳を閉じ安堵の表情を浮かべる。まるで我が家に帰ってきて安心したみたいなお表情。

いや、ドキドキしちゃうのも仕方ないよね。するなって方が無理だよ。

「俺なんかになんてけん制なんかしなくても誰も寄って来ませんよ」

桐生さんが言う悪い虫ってのは桐生さん以外の女の子のことだそう。だけど俺になんか女の子が寄ってくるわけが無いのにな。

何故かって？自分で言うのも悲しいけれど、俺の容姿は普通で特に何も目立つ物が無いからさ。でも別に悲しくなんてないもんね！

「それ、本気で言ってるんですか？」

「へ？え、ええ、本気ですけど・・・？」

少し呆れた顔をして聞いて来る桐生さん。あれ、俺って呆れられる様なことを言った？

まあ女の子が寄って来るほど格好よくないのは本当なので本気だと言っ事を伝える。だってその位格好良かったら今頃チャホヤされて

るよ。

「ふう。まったく真さんは罪な男ですね。・・・だから私の想いにも気付かないんでしょうけどね」

「え？桐生さん、なんか言いましたか？」

「ふふ、何も言ってますんよ」

悪戯をしている子供の様な幼い笑顔。そんな笑顔にドキツとする。それにしても何言っただ？何か言ったのに、言っただけで無いつて言われるのが一番気になるんだけど。

青影荘には『夕日が沈むまでに帰って来い』と言う門限がある。その門限は夕日さんが独断で決めたもので、そこに俺の意見や俺の遊びたいなあなんて思いなんてものは欠片すらない。

更にその門限が俺だけにあつて、青影荘に住むもう一人の住人には門限がないのだ。理不尽すぎない？

昔、一度だけもしもその門限を破ったらどうなるのかを夕日さんに聞いてみると、何とも爽やかな笑顔で

「そつだなあ・・・食つ」

だつてさ。拳骨とかデコピンとかじゃなくてさ、食うだつてさ。我が青影荘の管理人さんすごいよね。もうお仕置きとかそんな次元じゃないよ。死活問題さ。

「うりゃあああ！時間がないいいいい！！！」

そんな訳で緩やかに沈んでいく夕日を背に門限までに帰る為いや、生きる為に俺は自転車を必死に漕いでいる。早く！早く帰らねばいかんぜよ！

自転車はビュンビュンと軽快に進んでいく。だがいつもほどスピードは出ない。

それもそうさ。いつもより自転車に掛かる重さが重いのだ。遅くなるのは当たり前だよ。

その遅くなる原因は荷台にある。そう荷台に座って俺の背中に幸せそうに抱きついてる桐生さんの所為です。

まあ、思いつきり抱き着かれて柔らかな何かが背中に当たっているので漕ぐことに集中できないってこともあるけどね。

「真さんもっとゆっくり漕いでもいいんですよ？」

「む、ムリトウヌス！！！」

急いで自転車を漕がないといけないわ、柔らかいものが背中に当たっているわ、食うってどんな風に食われるか考えてしまっわで変な言葉を口走る俺。

可愛く小首を傾げて「・・・ムリトウヌス？」って意味を考えている桐生さん。意味なんてないから流して！流したってくださいな！

「み、見えた！」

少し向こうに見えたボロボロの我が青影荘。門限に間に合ったつとペダルを漕ぐ少し力を抜くのも束の間、燦々と輝く夕日を見てみるともう僅かしか見えていない。

「エンジン全開！俺、全壊！」

再び訳のわからないことを口走ったが気にしてなんかいられない。目一杯の力を込めてペダルを踏む。俺、まだ食われたくないんだ！

一気に加速がつく。それと同時に夕日の光も薄くなる。残り百メートル、間に合え！

消え行く夕日と凄まじい勢いと共に青影荘の敷地内に突っ込む。セーフだよな？セーフだよな！？

「アウトだな」

非情な声が敷地に響く。声が出た方に振り向くとそこには不敵な微笑みを浮かべる夕日さんがいた。え？まさかアウト？そんなまたまた、冗談か聞き間違いだよな。

「ま、まさかだと思えますけどアウトですか？」

「ああ、アウトだ」

第十話 夕日に佇んだりしなかったり（後書き）

皆さんこんにちは。

異常な暑さと湿気に意識を持っていかれそうなゆきさだです。

暑いですよ。ええ、暑いです。まだ真夏でも無いのに暑すぎです。ホント暑すぎ！

この暑さはアレですね。サウナですよ。座ってキーボード、カタカタしてるだけで汗でますもん。

この暑さは扇風機の風力弱ではもうカバーしきれません！

どうか皆さんもこの暑さで熱中症や脱水症にならないよう気をつけてください！

それでは皆さん、また十一話で会いましょう！

祝20000アクセス突破！

やりました！20000です！大台突破ですよ！

これからも皆さんに読んでもらえるような小説を書いていますのでどうぞご愛読お願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2932e/>

俺は君のもの！？

2010年10月28日08時50分発行